

資源環境経済学特別演習 II 議事録 (5月)

2012年度第1回

報告題名: 中国内モンゴルにおける持続的酪農経営の展開条件に関する研究

報告者 : 斯欽 孟和

日時 5月31日 午後3時~

(所属分野): 農業経営経済学

場所 第二講義室

座長 中村 彰宏

議事録担当者 西田 陽平

出席者

長谷部、木谷、安江、小山田、米澤、米倉、冬木、伊藤、石井、スチン、神浦、宮里、池田、滝田、タンボウニ、中村、山口、泉井、Bayu、金、黄、今井、渋谷、室井、ナスムンク、徐、趙、劉、井坂、伊藤、井上、志賀、西田、渥美、伊藤、佐々木、青木、八木

報告要旨

内モンゴル酪農は、牛乳・乳製品の消費増加と政策的支援のもとで零細小規模の複合経営として発展してきたが、近年になって、零細な小規模酪農が生乳取引価格の変動の影響を強く受け、大規模牧場へ再編されている。そして、その展開方向は、乳牛や施設などの改良による生産効率の高度化であり、フリーストール牛舎・ミルクングパーラー施設化に代表される企業的な経営(企業直営牧場と家族経営を基盤とした大規模牧場)である。その一方で、乳肉複合経営が出現し、低投入・低生産の放牧型酪農経営も実現している。

但し、内モンゴルにおける酪農構造をみると、小規模酪農が非常に多く存在している。中国乳業年鑑によると、2009年末時点でも飼養頭数が20頭以下の酪農家が全酪農家戸数の97%を占め、それら小規模酪農家による乳牛飼養頭数は総乳牛頭数の67.7%を占めている。そのため、酪農構造改革のもとで協業・共同経営型の乳牛小区や乳牛合作社などが建設され、そこに小規模酪農家を組み入れようとしているが、先進的な畜舎・施設などをすべての経営に導入することは難しい。

本報告では、日本の酪農経営発展とその研究動向は、飼料自給率の向上や乳牛の健康のために放牧型酪農経営が展開されていることから内モンゴルにおける酪農経営発展に機能する論理を明らかにする。また、内モンゴルにおける酪農構造の変化を取り上げ、環境汚染と経済収益の両面について事例分析を行い、その結果から今後の内モンゴルにおける酪農経営の展開方向を解明し、その持続的発展のための課題について提言する。

質疑・応答

池田：所得率はどうやって出したか。

スチン：所得率の計算方法は資本、収入、労働時間、飼料等の費用から出した。

池田：酪農業収入と酪農業支出は変動費か。糞尿処理施設の減価償却費が入っているかどうかを知りたい。経営と環境問題の両立を考えるのであれば、重要な要素となる。

スチン：導入しているところとしていないところがあるが、糞尿を分離するだけでも費用がかかる。発酵させて、肥料にする場合もある。

池田：糞尿はほとんど再生可能な循環型の肥料として利用するのか。

スチン：ほとんどはそうなる。

安江：収益分析の所で、粗収益を計算できるだけのデータは持っているか。

スチン：酪農に関連するところだけは持っている。

安江：すべての事例でデータをもっているか。

スチン：E 牧場だけは向こうの事情で持っていない。

安江：細かな分析をするにはこのようなデータが必要になるはずである。早めに手に入れるべき。

米倉：今回取り上げた酪農牧場は、内モンゴルの酪農企業経営を代表しているのか。

また、小規模な経営を捨て、取り上げた企業だけで内モンゴルの酪農の動きを表すことができるのか。

スチン：企業直営牧場は去年の報告で分析できている。酪農の企業経営は技術を持った小さな牧場が周辺の農家を買って規模拡大している。また、それ以外の小さな牧場も周りの大きな牧場によって変化しており、事例研究はしないまでも、全体の変化を押さえれば酪農の動きは把握できる。(企業直営牧場の規模拡大の現状及び分布図を指して) また、このように大規模牧場の規模拡大は小規模酪農経営体の動きも把握することになる。

長谷部：A、E、F が代表的な事例で環境と経営について線形計画をして最適解を出し、持続的発展可能な酪農経営を探るのが論文の軸だと思うが、そうすると第2章の日本の酪農構造変化とその要因を上げる理由はなにか。関連がわからない。

スチン：昔から、日本の酪農経営は飼料を輸入しても、利益を上げてきた。また現在、糞尿処理や放牧型の経営、技術の研究が多いが、発展段階にある内モンゴルの酪農に参考すべき点は多くあると思う。

長谷部：そのような理由、線形計画を使って分析している日本の論文はあるか。

スチン：ある。いくつか参考にしている。